

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	花園に立ちて：文苑
Author(s)	吾妻，芒村
Citation	龍南會雜誌， 1 0 9： 3 2 - 3 8
Issue date	1905-01-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5781
Right	

文苑

花園に立ちて

吾妻 芒村

春の巻

夕日今、百日紅のしづ枝に輝きて、芭蕉の葉を渡る風寂しく、ハマナスの花、高き芬香を放ちて散り乱れ、花園馨はしく匂ひ渡りサンザシの花も萎みつくしては。新しき緑の木蔭葉蔭に、忍冬の這ひまつはれる垣のほとりに、夕暮の色、やゝに迫りて、あたりほの暗くなりゆきぬ。われひとり閑寂の幻境をさまよへば、ゆく春の花園の夕べ、何ぞしかし吾心を疼ましむる。あはれ、九十の春光已に老いつくして、雨幾度か灑ぎけむ百花の色香空しく消に褪せて、光暖かき五月の空春は已に吾世を去らんとするにあらずや。今し、こゝに佇み、空に聲なき聲を慕ひ、影なき影を追ひて無限の思にふければ、風に悲哀の韻あり、花に寂莫の色あり、翔虫は耳邊をめぐりて、幽かなる音に囁きぬ。

目もあやに咲き出でたる芍薬の花、曙の色はのかなる薔薇の花、こぼるゝ菫の色も優しく、数片の花辨土に委して、白木蘭の下影、栩栩然たる揚羽蝶は、翅をよする宿なきを唧つらむ。春は老いぬ、

花なき枝は緑葉しげし、されど匂ひ溢れし三春の面影をとめて、残るや一脈の香、いづらか園に漂へるを思ひ、更に聲なきうたを慕ひ、影なき姿にあくがれて、双手さながら扉のごとく吾面を蔽ひ、青き芝草の上に横はりぬ。

あゝ歌よ、影よ、吾は汝を慕ふ、吾世の美はしきもの、樂しきもの、聖きものは皆汝等のうちにぞこもれる、これ吾命にして吾力なり、又唯一の吾友なり、吾汝等を思ふ、さながら曙の雄鹿、谷川水をしたふに似たり。あゝ歌よ、何ぞしかく幽かなる、あゝ影よ何ぞ然く臃ろなる。歌よ、汝の韻き、さながら暮鐘の、光薄るゝ夕空に消ゆるごとく、次第に吾胸より遠かるるとき、如何に大なる悲みの吾心に湧くを知る乎。影よ、汝の姿、たばろになりまさりて、やがては春の海に浮べる白帆の影、八重の霞に消ゆるがごとく、またくうすれ終るとき、吾胸中希望と歡樂とは全く其影をひそめ、濁惡と不安の念にみたされぬ。あゝ、歌よ影よ、汝等がまたいづくにかひゞき出で、いづらにかあらはるゝ時、吾よろこびとのぞみはまた、よみがへる。歌よ、影よ、汝等の中につきぬ愛はこもれるにあらずや、とこしへの生命は湧くに非ずや。汝等は死の蔭の谷より吾を導き回して、シオンの光明に向はしむ。首にそゝがれたる尊きあぶら、鬚にながれ、アロンの鬚にながれ、其衣の裾にまで流れしたるが如く、またヘルモンの露くだりて、シオンの山に流るゝがごとし。

あゝ歌は幽かなり、影は仄かなれども、いつしか吾目と吾耳とは明かにかの歌をきく、かの影を見

寒

でやは止まん。一枝頭上三個の蕾、夢のほとり曙の色を染めていまだひらかず、彼等の間は近けれども、互に交はらざるなり、されど何時かかの二つの蕾はひらきて、互に花瓣を接し、無限の歡樂をうつくる時なからんや。吾心と肉と眞に聖まらば、いかでとこしなへに歌と影とに逢はざらむ。盤間に居り、斷崖の匿處に居る吾鴿よ、吾になんちの面を見させよ、なんちの聲をきかしめよ、なんちの聲は愛らしく、汝のかほは美はし。

苑

聞け、歌はひゞき出でぬ、シオンの歌はひゞきぬ、バビロンの河邊にかけたる琴の音が、さては御空の春の歌か、曲は何ぞ、「リ、ーズ」か、「シオン」か、「ヘブロン」か、「ゼ、リ、ト、オブ、ゼ、ブレイ」か、吾心は遠く御空をかけりて、天の美酒を酌みしがごとく、はた美はしき園にまよひて、乳と密との流れに逢ひたらんがごとし。シレネーズに勝ちしオルフォイスの琴か、流魚も出でさしゑゑ巴の瑟か、あらず、あらず、皆あらず、これを吾いたく慕ひし吾歌なる。見よ影はあらはれぬ其頭は純金のごとく、其目は谷川の水のごとくに居る鴿の如く、乳に洗はれて美はしく嵌れり、其頬は馨はしき花の床のごとく、香草の壇のごとく、その唇は百合の花のごとくにして没薬をしたらす、其手はきばみたる碧玉を嵌めし黄金の釧のごとく、其躰は青玉をもてたはひたる象牙の彫刻物のごとし、其脛は礫石の柱を黄金の台にたてたるがごとく、其相貌は、レバノンのごとく、その優れたるさまは香柏のごとし。あゝ美はしく慕はしき哉愛の姿、リコーカデアの岩上に立ちし、サツペーか、黄泉に下りしオイリデーイチュか、あらず、あらず、皆あらず、これこそ吾あくがれて、

狂はんとしたる影ならずや。うたは愛の曲を奏で、影はヘルモン山上の光のごとく愛にかゝやけり。吾歡樂の幻境にさまよふ事しばし、忽ち吹來るつめたき夕風に、うたは消ねぬ、影はさねぬ悲哀の情想は心にみちて、哀歌自ら口に溢れ吾心はあやしきまでに悲しくなりぬ。

あゝ悲哀よ、何ぞしかく人をして疼ましむる、汝は人をして苦ましめ、泣かしめ、狂はしむ、ゲッセマネの園、橄欖樹の影、月光はのかなる幽境に「人の子」は血を流して泣きぬ、木の葉もねふる真夜中に、靜寂の中に孤坐して、彼の悲哀は如何ばかり大なりしぞ。さはれつひに「苦き杯」はとり去られ、かくて彼が心靈の根底に於ける一大調和は、玲琅月のごとく、生命より湧き出づる光は、煌として萬物に照りぬ。悲哀の發動は平和の第一歩に非る乎。煩悶の暗影は歡樂の光明の表現にあらざるか、大になやむ者は、大になぐさめらるゝものに非るか。夫れ人類が懊惱の根底は他に對する吾愛の要求の容れられざるによる、（皮相の見を以つて見る勿れ）、悲哀と煩悶とは愛の不足に對する心情の發現にすぎず。あゝもろくの快樂の中にありて。いさうるはしく慕はしき愛よ、吾をしてたゞちに汝の聖なる境に入らしめよ。肉をはなれたる高き愛に酔はしめよ。吾は苦き杯を辞せじ、吾は泣かん、吾は狂はん、かくて願はくは愛の極致に達するをねん。

青き芝草の上、芍藥の花の乱るゝ所、風はしづかに吹きめぐり、翔虫はなほ耳邊に唸りぬ、日影はすでに百日紅をすべり、芭蕉の葉を這ひつゝし、世は暗くならんとす、やをら立ち上れば、薄曇り

たる夕空に暖かき風すぐるよと見る程に、雨はしめやかに降り出でぬ。一路の小徑を越えて彼方、
穗美はしく伸び出でたる麥の畑に、いそしみたりし一人の農夫も今はとて歸りゆく姿、破れたる築
地のほとりに消れて、雨はやくにしげく、麥はいよく青く、芍薬はいよく散りしきりぬ。(五月)

秋の巻

自古逢秋悲寂寥 我言秋日勝春朝

晴空一鶴排雲上 便引詩情到碧霄

一夜瑤落の聲しげく、月光冷かに吾窓よりさし入りて、心にしむと覺わし朝、殘月は欠けて大空に
うかび、滿地の霜に、櫨の落葉ぞしげかりしげに秋は來れるに非ずや。

蟪蛄の翅は枯草の色にかはりて、蟬の聲、いつしかきねぬ、上下空明、寥廓萬里、夕陽さびしき江
南の田家、柿實は梢に赤く、百舌鳥の聲鋭く、無限の閑寂を破る。こゝに入日の光しばしきざろひ
て、楚々として風にゆらめく黃菊白菊をてらし芭蕉の葉は破れに破れて、夕風に高鳴る、吾耳邊を
めぐりし翔虫も影をひそめ、樹々の疎影暗きところ、落葉が下の蟋蟀の聲。昨日まで高きにはひを
靜寂の空にはなちたりし木屋のいぶきも何方にかきねぬ。かの聲なき歌を慕ひ、影なき影にあくか
れてひとり幻境をさまよひし春は夢のごとくすぎて、見よ、今し蒼穹は朗々として鏡のごとく大氣
は澄みて水に似たり、吾をめぐる澄澈の萬物は、吾想像を高め、思念を清め、敬虔の信念に横溢せ
しむ、あゝ吾はふたゝびこの花園に立てるなり。

朗々たる天蓋に玲瓏の月を仰げ、颯々たる風に、吾思ひを馳せよ、默思の秋は來れるに非ずや、今やこゝに立ちて無象の蒼穹を仰ぎ、煌々たる星斗のまた、きをながめやれば、吾想念は益々高く、清らかにして、漂渺として宇宙をかける。こゝに於て深く人生の意義と無限の默示を思へば、萬物肅然として、吾想の馳するに任す。秋はそれ默思のとき、カーライル曰く「静默の世界は獨大なり」と、あゝ秋や大なる哉。

ユーラン半ば成りたる洞窟の秋、風に觸れ、落葉に坐し、靜かに宇宙の神秘を觀じたるはそれや。メットか、秋は深し靈鷲山、菩提樹の蔭に人生の意義をきはめしはそれ佛陀か。逝者如斯、聖者は江に佇立して大江の秋に盤桓し、靜寂バトモスの秋は豫言者に彼の歌と影とをあらはしぬ。秋は吾人をして人生の意義と、生存の價值とを思はしむ、秋は吾人をして古來の青史を慕はしめ、偉大なる生靈を思はしむ。吾思念明澄澄澈の時吾はたゞ彼の「人の子」を思ふ。夕陽は沈むガリ、一の湖邊、白雲紅葉の橄欖山、如何に「人の子」の心を引きけん、ジェルサレムの城門に入日の影さびしく、殿堂のいらか、雲にそびえたり。汝は如何なる「うた」と「かげ」を以つて「人の子」に對したる。

秋は深しパレステイン、ヘルモン山は銀冠をいたゞきて中空に高く、ヨルダンの河は泪々として晝夜をねかず、白雲紅葉北にそびゆるはレバノン山、南方に高きはそれサマリヤの秀峰、法ザレの近

郊には秋草曉の露にうるほへり。神の選民は邪れて「風」に吹かるゝ葦に異ならねど、自然の山川風物秋に清く滌氣はみなぎりて扶輿磅礴す、あゝ晴明の秋、如何に彼の情懷を聖めけん。

彼は是愛なり、吾歌なり、吾影なり、吾生命なり、吾力なり、彼は愛に生れて愛に死しぬ。あゝ偉なる哉愛や、愛の靈焔人の心中に燃えて人始めて聖し、愛の爲めにたゞかへる人最も高し。ダンテは高し、彼は「愛の記者」なればなり。ステパノは聖し、彼は「愛の戦士」なればなり。あゝ大なる哉愛や汝によりて人生始めて意義あり、生存始めて價值あり、汝は人格の基礎にして、社會進化の根柢なり。あゝ愛よ、汝は吾生命なり、とこしなへに汝の焔を吾胸中に狂はしめよ。吾をして汝の記者、汝の戦士たらしめよ。

夜は草木の上にねふれり、人なき花園の月は皓々として黄金の船のごとく藍碧なる青雲の海に浮び天漢炤として吾頭上にかゞやけり。この世の人は今し甘きねふりに入りけん、あゝゆる喧騒の聲はたわぬ。虫聲蟬々又唧々、徐かに歩をめぐらして園をいづれば、枯木空に高く、霧に咽ぶ孤雁大空に影淡し。

あゝかくて秋は老いんとするに非ずや。(十一月)